

本協力者会議におけるこれまでの主な意見

	幼児期の教育に関する意見	小学校教育に関する意見
幼児期から小学校にかけて子どもたちが身に付けてほしい力	○ 幼児教育から小学校に向けて「学びの基礎力」を育てる必要がある。 ・興味：何についても興味をもってかかわろうとする態度 ・自己統制：集中する持続する力。目的を持って行動するために、気持ちを調整する力。粘り強く取り組み、つまづいたら工夫する力 ・気付き：関わる場所から面白いことや不思議なことに気付き、言葉にしていく力 ・協同：仲間と協同して目的を達成する力 ○ 幼小の移行のために子どもに求められる能力は、学習に必要な認知能力だけではなく、社会的能力としての可塑性、柔軟性が移行を支える能力の基本である。 ○ 幼児期から児童期にかけて楽しさなどの感情や動機付け、信頼から協同へという関係性を育てたい。この時期にはメタ認知のような力が育ってくるので、それらを生かした形で内容的にも学びを深められる。 ○ 幼児期から小学校にかけて育てたい力 ①自立と協同 ②集中と信頼 ・夢中になって遊ぶ、興味を追求する、自己目的をもつ ・安心する、つながる、仲間意識をもつ、力をあわせる、役に立つ ③子どもが自ら育とうとする力（心情、意欲、態度） ○ 幼稚園での実績記録の子どもの姿から、より詳細に子どもの学び、育ちをみると ・生活の中で数の必要性や便利さに気付き、身近なものの数を数えたり、比べたり、分けたりする。 ・身近な物の量を比べたり、自分なりに測ったりする中で、量への感覚を豊かにする。 ・身近な物の色や形に興味を持ち、分けたり集めたりして遊ぶ。 幼小のギャップはないどころか、十二分な学びを実現していることをもっと知ってほしい。 ○ 幼小を通じて、命の尊さや命への感謝をしっかりと伝えていくことが必要。 ○ 幼児期から小学校にかけて、子どもが我慢することができる力を育むことが必要。子どもが自分の伸びや成長を自覚できるときに、併せて我慢する力も身に付くのではないか。	○ 小学校教育の原理は自覚的な学びにある。 ・集中性：時間が来たら、気持ちを切り替え、集中する。 ・課題性：与えられた課題を自分の課題として取り組む。 ・目的志向性：目当てを持って、追究する。 ・言語性：いろいろな発言を結びつけて言葉にして考える。 ・自覚性：自分の学んでいることを自覚して、計画的に学習活動を行う。
	○ 幼児教育の原理は無自覚な学びにある。 ・楽しいこと ・身の回りのすべてについて知ること ・作り出すこと ・集中すること ただ楽しいのではなく、幼児が能動的に、物事に集中できる力を育てることに、幼稚園教育の遊びの意味がある。 ○ 小学校入学までに何を体験させておきたいか（育てておきたいか） ①人や物事についての興味・関心（好奇心・意欲） ②自分でやってみようとする・かかわろうとする力（主体性） ③人の話を聞き、その言葉を受け止めながら考えを進めていく力（思考力・判断力） ④自分の気持ちや考えを伝えようとする力（表現力） ○ すべての学習の基礎になる言葉の学習は、幼児教育修了段階で全員を一定の水準まで上げておく必要があるのではないか。 ○ 小学校入学時に、文字が書けたり読めたりする、数の理解ができるかどうかより、教員の話が座って聞けることが重要であり、子どもたちに聞く態度が育っていないと授業が進まない。 ○ 幼児期の教育で特に身に付けておきたいこと	

幼児期から小学校にかけて子どもたちが身に付けてほしい力	・生きるために必要な基本的生活習慣の自立をしっかりと身に付けさせること ・自分の思いが人に伝えられること ・社会的規範やルールが分かり、守れるようになること ・人と関わる力を育てること こうしたことを無理なく身に付けられるような環境や遊びの工夫が必要。 ○ 5歳児に対する教育 ・時間で動く感覚を身に付けさせる。 ・集中する時間を徐々に長くして集団で行動することに慣れさせる。 ○ 幼児期での生活習慣や聞く力と、小学校段階での生活習慣や聞く力とでは同じ言葉でも意味するところに違いがあるのではないか。 ○ 小学校1年生の第一歩としては、子どもが「学校は楽しい」「学校に行きたい」と思えるようにすることが大切。 ○ 幼稚園教育では、心情、意欲、態度などを育成することを重視してきたが、その方向性を見直す必要があるか。 ○ 我慢する力と言っても年少と年長とでは異なるはず。子どもの発達という時間軸で考えることが必要。 ○ 我慢する力を養うためには、上から目線ではなく、子どもをほめる、認めてあげることで、子どもが我慢することの意義を理解できるようにすることが大切。それが自覚につながる。 ○ 我慢する力という誤解を受けやすいので、回り道する力と呼んだ方がよい。我慢するけど目的の達成を目指して工夫する、ただ待つのではなく、工夫しながら考えて待つということだと思う。 ○ 例えば手の発達で言えば6歳の就学までにはさみが使えるようにということを言われると、はさみがうまく使えない子どもの自己肯定観にはどうつながるのか。	
幼児期から小学校にかけて身に付けてほしい力を育成するための活動	○ 幼小接続は、移行期間に育てておきたい能力や子どもの育ちの姿を規定し、そのために必要な活動を自律的に園や学校が考えていくべき。 ○ 小学校において遊びの要素を取り入れることは重要だが、幼稚園においても遊びの中で特にこの部分はしっかりやるという計画的な指導が必要。 ○ 幼小連携カリキュラムを作成しておき、実施の都度、両者にとってより意味のある活動になるよう見直すことが必要。 ○ 幼稚園での実践を見ると、小学校の生活科での身近な自然を利用して遊びや遊びにつかう物を工夫してつくる活動や図画工作での造形活動と相通ずるものがある。 ○ 遊びや生活の要素を含む総合的な内容から、教科の学びへと繋がるよう、心情・意欲・態度の学びを核として、質の高い様々な学びが生まれる可能性を考えて内容を構成することが必要。 ○ 幼児期の教育と小学校教育との交流体験の実施について明確な指針を示すことが必要ではないか。 ○ 幼児期の終わりまでに可能としたい主な活動 ・身体の中のどの部位も柔軟に動かす活動：運動遊び ・共通の目的を持って協力する活動：協同的学び ・思いやりを抱いて助け合う活動：道徳性の芽生え ・決まりを守り、気持ちを調整する：規範意識の芽生え ・物事に好奇心・探究心を持ち、気付きを言葉にすること：思考力の芽生え ・言葉を使って話し合う活動：言葉による伝え合い ・感じたこと、思ったことを表現し、それを見直すこと：表現力の芽生え	○ 5領域に根を張って教科へと育っていく ・国語：体験を基に言葉でやりとりする。絵本を見る・読む。言葉遊びをする。考えや感じを言葉にする。 ・算数：遊びや生活の中で数える。積み木などを通して立体的図形感覚を養う。 ・生活：目当てを持って活動に取り組み、気付いたことを言葉にする。 ・体育：運動遊びを通して、身体部位を柔軟にバランスよく動かせる。 ・音楽：好きな歌を歌う。楽器を体験する。音に敏感になる。 ・図工：絵を描いたり、造形活動を行う。遊びのためにものを作り、組み立てる。作ろうと思う物を構想し、工夫する。 ・道徳：決まりを分かり、それに合わせて、自分のやりたいことを回り道して実現する。他の人の困った様子が分かり、思いやりを抱き、助け合う。 ・特活：いろいろな人に関わり、一緒に活動する。

幼児期から小学校にかけて身に付けてほしい力を育成するための活動	○ 幼児期に自分が大切にされている、他者の話をしっかり聞き取るなどの共通の経験を保障しなければならない。 ○ ことばの認識、数の認識、他者の認識、自然や生き物の認識、集団や社会の認識、場の認識、自分の認識等を深めていくための環境づくり、働きかけを、遊びを中心として総合的に図るとともに、それぞれを意識して計画的に取り組むことが必要。 ○ 例えば、年長の教室で、勉強の時間として毎日30分くらい設けてはどうか。そこでは、特に言葉の指導、数の指導、自然観察等を生活体験をベースとしながら計画的に行うことが考えられる。 ○ 幼児が小学校での教科等の勉強に違和感を感じるとするならば、幼稚園段階で勉強を意識させ、それは遊びと同じように楽しいものだの実感させることが大切。そのことで遊びの特質を教科の学びの中にも活かしてくれるのではないか。 ○ 保育所・幼稚園では、①食育、②基本的生活習慣の獲得、③ことば使いをしっかりと行うことが大切。	
	(人とのかかわり) 協 同 ○ 幼児教育から小学校に向けて「学びの基礎力」を育てる必要がある。 ・協同：仲間と協同して目的を達成する力 【再掲】 ○ 幼児期から児童期にかけて楽しさなどの感情や動機付け、信頼から協同へという関係性を育てたい。【再掲】 ○ 幼児期から小学校にかけて育てたい力 ①自立と協同 【再掲】 ○ 幼稚園で協同して遊ぶようになる過程は、小学校で幼稚園で経験したことを生かしながら、もう一度同様のプロセスを繰り返すことになると考えられ、これにより、らせん状に学習が深まっていくものと考えられる。	
	○ 学年が上がるにつれて、協同活動、共有化を重視することが必要。 ○ 協同して遊ぶことがすべてではないが、他者とのつながりが基盤にあることの認識は重要。 ○ 幼稚園教育で協同して遊ぶことのみを強調するのはどうか。	
	(ものとのかかわり) 探 究 ○ 年長になれば、あることにかかわって、興味・関心をもったことを、調べたり、取り組んだり、振り返ったりすることを意識的に行うことによって、学びが自覚できるのではないか。 ○ 長期的にテーマをもたせた調べる学習やつくる学習などを行うことやその発表を計画的に行うことが考えられる。 ○ 知的探究心を刺激し、主体的な学びの意識が持てるようにすることが必要。 ○ 「探究」＝「問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動」「物事の本質を見極めようとする一連の知的営み」は、ある意味で幼稚園的なのではないか。	
	言 葉 ○ 子どもは読むことに興味を持っており、絵本のことばの感覚は育っている先生が読んだことをみんな言ってみたいと思っている。子どもは自分の考えが文字で表現できるとうれしいと感じる。	

幼児期から小学校にかけて身に付けてほしい力を育成するための活動	○ 幼稚園では文字を教えない印象があるが、文字を使うことにより言葉のイメージを共有化できる。 ○ すべての学習の基礎になる言葉の学習は、幼児教育修了段階で全員を一定の水準まで上げておく必要があるのではないか。 【再掲】	
	数 量 ○ 子どもが数量等の概念を精緻にしていくこと、世界の精緻化を図ることは、幼稚園段階、小学校段階とは関係なく行っていることである。子どもの成長の観点からは幼稚園も小学校も同じ方向を向いているはずであり、幼小の違いを対立的に捉えると子どもの実態から離れていく。 ○ 5歳児と1年生の合同活動の一環で、牛乳パックを集めたが、牛乳パックを入れた袋の束を自分の目で見ることにより、実感として数を捉えることができた。	
	教育課程の基準の示し方 ○ 小学校学習指導要領と幼稚園教育要領、保育所保育指針の編成原理の違いについて共有化が必要。 ○ 幼稚園と小学校の教員の専門性や風土の問題があり、その違いを克服するため、行政レベルでの言語をどのように示せば教育現場に浸透するかを考えることが必要。	○ 幼稚園の遊びの中で数や言葉を扱うことと、数や言葉について系統的な位置付けをもって指導する小学校の教科とは異なるので、単に数を扱うだけでは小学校段階で求められる学習にならないのではないか。
	○ 幼稚園教育要領の「…に関心を持つ」という示し方と実際の幼稚園での子どもの姿とは乖離がある。現行の示し方は幼稚園でどんな作業や思考をしているのか、幼稚園関係者以外には伝わらない。もっと外に伝える努力をするとともに、示し方についても検討の余地がある。 ○ 現行の「…に関心を持つ」などの示し方では抽象的で若い教員等にも伝わりにくい。何か言葉をつくってはっきり示すことが必要。 ○ 幼稚園では子どもの学びの姿はいくらでも言えるが、それがねらいと言われれば抵抗感がある。ねらいというどうしても誰ものがあるに達しなければならない印象がある。 ○ 現場の実践の中で伝えていくことはできるが、行政レベルの言葉をどう変えたら現場にうまく伝わるかはなかなか難しい。	
	単元構成 【単元構成原理の違い】 ○ 子どもの遊びや生活を基盤に、彼らの興味・関心から活動を組織し、活動展開の先で教師から見ても価値ある学びを生み出す。 子ども→活動→内容という順序：「経験単元」的	○ 価値ある内容の実現に適した活動を教師が考案し、導入の工夫等によって、子どもにとっても意味のあるものとする。 内容→活動→子どもという順序：「教材単元」的
	【単元構成の在り方に関わる誤解や批判の解消】 ○ 活動組織や環境構成を通して、さらに支援によって、子どもが「何を学んだのか」を丁寧に記述し、小学校にも伝えたい。 【1つの単元で実現される内容の範囲の違い】 ○ 活動→内容なので、一つの単元で実現される内容は5領域をまたぐ。	○ 改めて幼児教育の教育方法に学びたい。遊びや暮らしを基盤に学びを紡ぎ出すことを教育方法上の原理としている生活科の授業の質的向上にも大いに貢献。 ○ 内容→活動なので、一つの単元で実現される内容は、原則として特定の各教科等の枠内に留まる。
幼小の指導観・子ども観などの違い、指導方法・指導体制の工夫の必要性	指導方法（指導観・子ども観の違い） 【幼小の指導方法等の違い】 ○ 幼児一人一人が経験していることを大切にする幼児教育と、各々の持っているものを刺激し合いながら一つのものを作りあげていく小学校の授業風景はかなり異なる。	

幼小の指導観・子ども観などの違い、指導方法・指導体制の工夫の必要性	○ 幼稚園や保育所の先生方は子どもと一緒に生活しているので子どもの発達が見えてくる。一方、小学校の教員は子どもと一緒に生活しているが、どうしても教科の内容が先に立つので、子どもの発達や思いが見えにくいところがある。 ○ 幼稚園の教員は子どもに聞き、遊びの中からルールを子どもたちに決めさせるが、小学校教員はルールやきまりを教員が指示する。小学校でも生活科ができて子どもへの指示が少なくすることができた。 ○ 幼稚園と小学校の教員が各々の違いを認識した上で、考え方を共有することが大切。 ○ 幼児教育の方法は環境を通しての保育にある。 ・安心していられる：居場所を作ること。保育者との信頼関係 ・やってみせる：保育者の振る舞いが重要 ・ものを置いて誘発する：環境設定が基本 ・仲間同士で高め合う：子ども集団の持つ教育力 ○ 子どもの発達と学びは連続しているが、教育方法はそれぞれの時期で異なる。幼児期の発達の特性にふさわしい教育方法が必要。 ○ 環境を通しての教育を連続化することが必要。環境を「幼児たちが創る環境」「幼児と教師がともに創る環境」という側面を強調すると、この環境を授業も含めてとらえれば、小学校とつながってくる。 ○ 見通しをもって生活し一日を振り返る訓練をすることが必要。 ・朝の確認、帰りの振り返り（朝の確認のしかたや帰りの振り返りの方法を多様に工夫する） ・役割行動の認識 ・生活のリズムの確立 ・家庭との連携 ○ 「健康、安全な生活に必要な習慣や態度」「社会生活における望ましい習慣や態度」のように、幼稚園教育要領のねらいで「身に付ける」と示しているものは、家庭と協力して習慣化できるよう指導することが必要。 ○ 小学校低学年の教員が幼児期の子どもの指導方法を学ぶことで、小学校低学年にうまくつなげていけるのではないかな。 ○ 幼児期の教育で様々な内容を幼児は学んでいる。小学校の教育の指導力、授業の構成力など教育の質が問われる。 ○ 幼児の興味をひかない指導は幼児に見向きもされないという経験をしたことがある。幼児のやりたいという気持ちを大切にしたい指導が必要。 ○ 幼児の頃と同じような意欲を小学校でも持たせられるような指導の工夫が必要。 ○ 授業研究の協議で指導案に着目する小学校教員と子ども一人一人の表情に注目する幼稚園教員との授業でのまなざしの違いが、幼稚園・保育所で育ってきた子どもたちをうまく小学校の中で生かし切れていないことにつながっているのではないかな。 ○ 小学校教員にも、保育原理や保育理念の理解が必要。教育内容や方法の改善に寄与する。 ○ 小学校では幼児期の教育とは異なり、子どもたちを押さえつけて静かにさせようとする傾向が強いと感じる。 指導体制 ○ 幼小連携で大変だったのは幼小の教員で言葉の使い方、教育の形態、支援の考え方などが違っていたことである。使用する言葉やフォーマットを協議し、連携して一つの指導計画をつくりあげたことや、子どもの学びを皆で一緒になって見るところをスタートラインにおいて研究を進めたことが幼小連携の推進の上でよかったと考える。 ○ 連携を継続的に実施していくためには、職員の中で実践の報告をしたり、記録をしたりするなどにより共通理解を図り、園全体のものにしていくことが必要。 ○ 4月に多様な子どもが入学してくるが、集中できない子どもの対応は担任一人では難しい。学校全体で取り組もうとする校長の姿勢が重要。
幼児期の教育と小学校教育の連携・接続の在り方（接続期など）	接続期 ○ 幼児期の教育と小学校教育を円滑につなぐ時期として「接続期」を設定することが必要。 ○ 「接続期」を設定する実践もあるが、何をもって良質と捉えるかが重要。どういう指導方法がよいのか幼小で共有することが大切。 ○ 接続期は幼小の違いがあるからやらないといけないのではなく、この時期の取組を強化することにより教科等の学習が楽しくなるという視点から捉えるべき。 ○ 幼小の違いを前提として、接続期の指導の在り方を工夫することが大切。例えば、幼稚園5歳児後半では、小学校の学習の基盤となる協同的な活動を重視した保育を構想する。小学校では、発達の段階を考慮して、教育活動全体を通して総合的な活動を柔軟に取り入れる。 ○ 接続期のカリキュラムは生活領域と発達領域の両者を統合したカリキュラムを考えたい。 ○ 4、5歳児と小学校1、2年生のカリキュラムを学区内の教員が一緒になって構成する取組を行っている。4年間を見通したカリキュラムにより単年度の学びではできないことができる。 ○ 現代の子どもや大人の姿から見える課題を踏まえた、育むべき子どもの姿が具体的でないところに課題がある。幼児期から子どもの成長を積み上げていくといった視点からのカリキュラムの連続性を考えることが必要。 ○ 幼小の段差はあってよいが、よりスムーズな移行が必要。

幼児期の教育と小学校教育の連携・接続の在り方 (接続期など)	○ 3歳、4歳、5歳の子どもたちの発達をとらえた指導が大切。幼稚園、小学校とも互いの充実を図りつつ、連携を進めることが重要。	
	○ 小学校では遊びや活動に夢中になるだけでは十分とはいえない。何を学んだのか、何を習得したのか、活動することがどういう力になっているのかが問われる。幼児期の教育の中でも、幼児期以降のその後の一生にわたって学ぶ力を培うという視点で成果を明確に捉えることが必要。	
	○ 5歳児の教育方法を教科学習的なものに変えていっても成果はあがらない。非体験記憶は定着しない。	○ 幼小のギャップを埋めるのに、生活科だけで補うという考え方では通用しなくなってきている。
		【小学校でのスタートカリキュラム】 ○ 小学校低学年の良質なスタートプログラムを考えないといけない。幼稚園だけの取組では現状は変わらない。 ○ 幼小接続のカリキュラムは質の高い教育を幼稚園から小学校につないでいくものであり、低学年に遊びを導入すればよいというものではない。 ○ 幼稚園と小学校との本質的な違いを縮めるのは難しい。小学校においてそうした違いを受け入れるプログラムの作成が大切。 ○ 幼児期の教育で遊びの教育的価値を理解することが難しかったが、接続に関する教育課程をしっかりと位置付けることができれば遊びなどへの理解が進み、子どもの姿から学ぶことができる。 ○ 学習のきっかけとして、楽しんで取り組める活動や遊びを取り入れており、学習のふりかえりの場面では教科書を使用して学習を進めている。 ○ スタートカリキュラムの実施 (研究指定校の実践) ①入学から1週間 ア 基本的な生活の約束を身に付けさせる時間の設定 イ 1／2時間単位の授業 ウ 体験的な学習や安全な自由遊びの時間 エ 学校に慣れる時間から帰りの準備 ②生活科を中心とした合科的・関連的な学習 ア 具体的な活動や体験を通して学習し、教科学習のおもしろさに気付く イ 教科等の目標・学習内容・評価を踏まえた計画的な指導 ウ 十分な活動時間の確保
	【接続期の期間】 ○ 過去の研究開発学校では、5歳児後半（10、11月）から1年生入学又は1学期（7月）を接続期と位置付けて、幼児期から児童期へ円滑な移行に取り組む研究が見られる。	
	○ 年長の2学期ごろから、小学校での生活や学習を意識する。	○ 小学校1、2年生あたりは教育方法の移行期だという認識を教員も保護者も持つべき。 ○ 市の教育課程編成要領では、スタートカリキュラムの期間は入学当初1、2か月としているが、実際の期間は学校の実態に応じて設定している。
幼小連携・接続 ○ 幼小連携を考える上で、国レベルの教育課程の基準、指導計画や単元などのカリキュラム、教育方法、教育観の4つに分けて議論を進めた方がよい。 ○ 保幼小連携の研究指定においては、幼児期からの学びをうまくいかしながら、学校に慣れるように遊びを通して、時間を弾力的に運用する等の工夫をしている。 ○ 小学校で楽しく遊んだ体験が、小学校という新しい環境への不安感や緊張感を和らげ、新しい世界への期待感が高まる。 ○ 幼小連携は子どもの発達やカリキュラムの研究実績から検討した上で、結果としてつながっていくもの。目の前の子どもの発達を大事にしたい。 ○ 幼小連携では、「家庭の保護者の問題」「教員の連携」「子どもの実態把握」の3つの難しさがある。		

幼児期の教育と小学校教育の連携・接続の在り方（接続期など）	○ 小学校の教育感が多忙感があり、幼小連携のメリットの自覚と時間をかけなくても実践できるといったようなことを小学校の教員に明確に伝えることが重要。 ○ 円滑な接続も大切だが、各々の学校種ごとの役割をきちんと果たせるよう、小学校生活を円滑に開始することも重要。	○ 小学校の教育感が多忙感があり、幼小連携のメリットの自覚と時間をかけなくても実践できるといったようなことを小学校の教員に明確に伝えることが重要。 ○ 円滑な接続も大切だが、各々の学校種ごとの役割をきちんと果たせるよう、小学校生活を円滑に開始することも重要。
教育環境等との関連（養成、研修、保護者の理解等）	【幼小の相互理解の必要性】 ○ 学びの内容を幼稚園と小学校の双方で学び合うこと、幼児と児童の交流を通して相互理解を深めることが必要。 ○ 教師の研究、研修などを通して教育課程のつながり、教育内容・方法を幼小相互で検討することが必要。 ○ 保幼小の連携充実には、まず幼保の相互理解を推進することが、小学校との連携を図る上で重要。 ○ 幼稚園、保育所と小学校がよりより連携ができるようお互いの垣根をまず取り払い共通理解を進めていくことが必要。このため、お互いの教職員の交流ができるよう、授業や保育の体験、研修会などの工夫が必要。 ○ 保育所での遊びの体験を学びに対する意欲につなげていけるかは、小学校教員と保育士の相互理解が不可欠。 ○ 市内の小学校区又は中学校区単位で幼保小連絡懇談会を年１～２回開催しており、子どもの状況に関する情報交換の場になっている。 ○ 幼保小にとって互いに無理をした計画であると長続きしない。やり過ぎると相互に時間的な無理が生じ、マイナス面が生じかねない。 ○ 幼小の相互理解に立ったカリキュラムを考える上で、幼稚園の教員が小学校１、２年生の教科書を見ることが参考になるのではないかな。 ○ 幼小の相互理解に立ったカリキュラムを考える上で、幼稚園の教員が小学校１、２年生の教科書を見ることが参考になるのではないかな。 【戦前の幼小接続】 ○ 欧米では幼稚園修了後、継続して徐々に小学校教育に適応するように「接続級」が導入されていたが、日本では、幼稚園に「接続級」を設定し、幼小の円滑な接続の取組が行われていた。	○ 幼小連携について実際に何をやればよいか、多少戸惑うこともある。大学における教員養成の段階からも意識して取り組むことが大切。 ○ 採用５年次の教員研修で小学校から幼稚園に派遣する研修や幼稚園と小学校との人事交流を実施している。 ○ 幼小接続の推進のためには、 県市の指導主事が幼児期の教育と小学校教育の両方が分かる力を身に付けることが必要。 ○ 保育所の保育士は子どもと一日過ごしており、研修の時間がなかなか確保しにくい。研修の時間の確保が必要。 ○ 市の教育委員会指導室が事務局となって、市内の国公立幼稚園、私立幼稚園、公立保育所、私立保育所の４団体が加入する幼児教育研究協議会を設置している。 ○ 私立幼稚園、保育所と公立小学校との円滑な接続のためには、市町村教育委員会の積極的役割が必要。 ○ 幼児期の教育や小学校教育に家庭教育は密接に関わっており、家庭との連携を進めることが重要。 ○ 幼小連携の意義や内容についての保護者への理解と啓発が必要。 ○ 保小連携の取組の実施により、保護者が安心できる学びの場として保育所が小学校とつながっていることが認識できるようになった。 ○ 小学校教員の教員養成課程や教員研修に、幼稚園参観や保育参加を取り入れていくべき。